

藤原宮第58次発掘調査現地説明会資料

橋本義則

1988年11月26日

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

調査地点 橿原市高殿町

調査期間 1987年12月～

調査面積 約5000㎡

はじめに

当調査部では、1970年の第2次調査と1971年の第4次調査において、大極殿院東方の内裏東外郭地域で発掘調査を実施し、園池に関連するとみられる遺構・礎石建建物や内裏東外郭を画する掘立柱塀、東大溝などを確認した。そのうち1987年の第55次調査でも内裏東方の内裏東外郭地域について調査し、この地域に建物が配され、平城宮と同様に官衙地域を構成している所があることも判明した。

今回の第58次調査では、以上の調査成果に基づき、大極殿院東方における内裏東外郭地域の様相をより明確にすること、特に第2・4次両調査において南北70m以上にわたって存在すると推定されていた大規模な園池の検出を主な目的として、第2次調査区と第4次調査区に南北を挟まれる位置に、東西約110m、南北約50mの調査区を設けて、発掘調査を実施した。調査は現在も継続中で、遺構の規模や時期など不確定な要素も多く、また出土した遺物についてもその多くは整理の途中である。従って全ての遺構・遺物について報告するのは困難であり、ここではそのうち比較的まとまりのある主な遺構と整理の進んでいる遺物について解説を加えたい。

調査の経緯

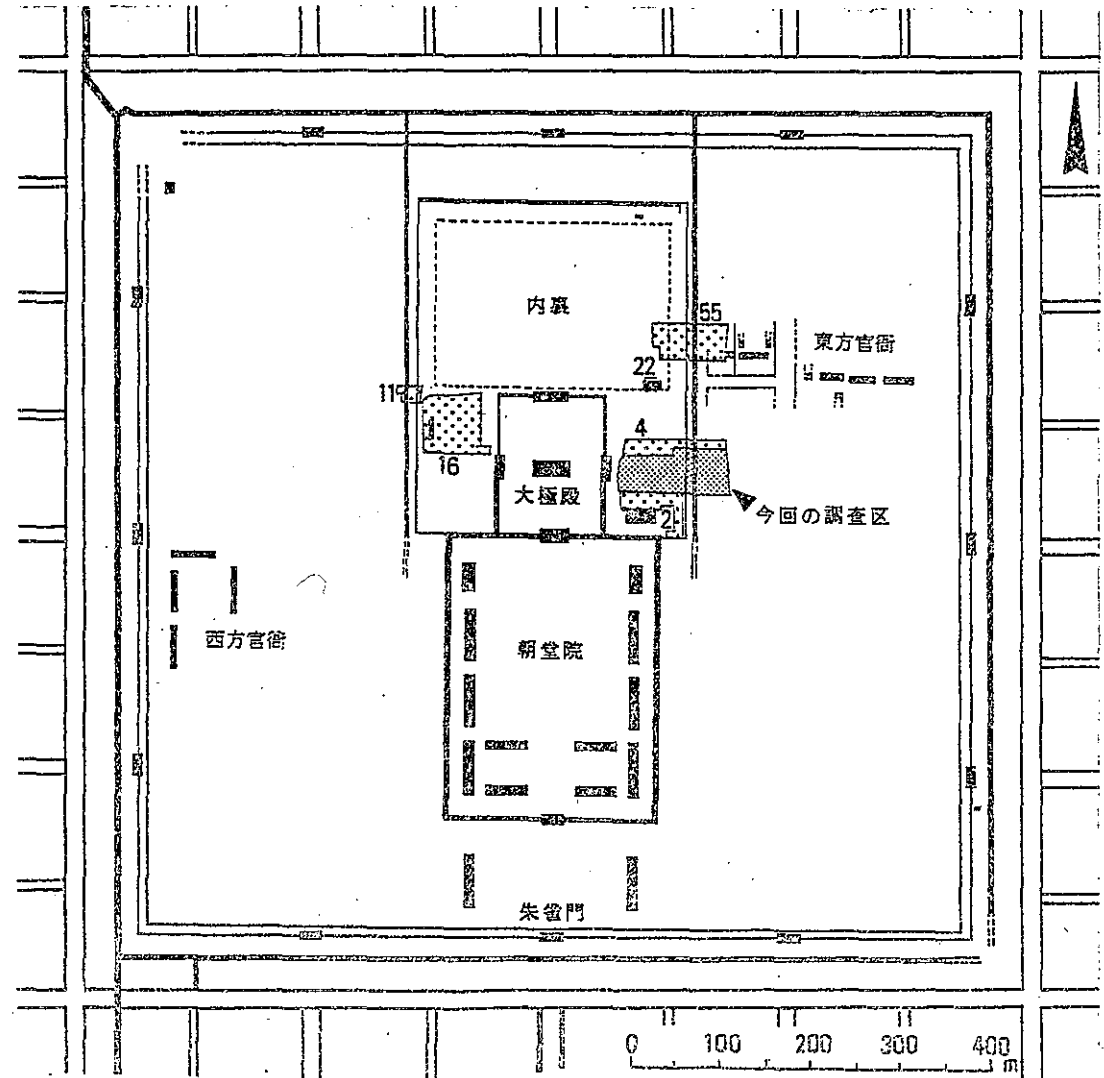
(1) 検出した遺構

検出した遺構は古墳時代から中世にまで及ぶが、ここでは藤原宮期を中心として藤原宮期・藤原宮期以前・古墳時代・藤原宮期以後に分けて説明する。

I 藤原宮期の遺構 内裏東外郭塀と東大溝、塀1条、溝6条がある。

内裏東外郭塀 内裏の東外郭を限る南北掘立柱塀で、今回13間分を確認した。

東大溝 内裏東外郭塀の東8mにある藤原宮の基幹排水路の一つ。幅5m、深さ0.7mで、堆積土は3層あり、藤原宮期に属するのはそのうちの中層と下層で、上層は藤原宮期の東大溝が埋められてのち、平安時代になって再度溝として利用されたものである。中層からは瓦・土器・木簡・木器と多量の加工木片などが出土している。なお下層については現在まだ掘り下げていないが、この溝の下流を確認した奈良県教委の調査(1966～67年)や第4次調査・第55次調査では、この層からも木簡・木器などを出土している。



調査位置図

堀 1 内裏東外郭堀の東32mにある南北堀で、18間分を確認した。溝1とともに東方に広がる官衙区画の西限を囲する施設である。

溝 1 内裏東外郭堀の東28mにある南北溝。

溝 2 内裏東外郭堀の東24mにある南北溝。従来の調査では堆積が3層あり、上層は東大溝同様に平安時代の溝で、藤原宮期の溝は中層及び下層であることが確認されている。現在は上層のみを検出している。なお東大溝とこの溝との間には藤原宮期の遺構はなく、幅13m程の南北道路であるとみられる。

溝 4 内裏東外郭堀の東2mにある南北溝。

溝 5 内裏東外郭堀の西8mにある南北溝。

溝 1 2 第2次調査区内で検出した東西溝。この溝は、第2次調査において調査区の北端で検出され、園池の護岸施設と考えられた石敷き遺構の下に潜り込み、石敷き遺構よりも古い。堆積土は2層あり、下層から瓦・木片を出土した。

斜行溝 1 溝 4 や内裏東外郭堀より古く、溝 5 や藤原京条坊施工期の溝 6・溝 7 や堀 2・堀 3・堀 4 より新しい溝。堆積土からは瓦が出土した。なおこの溝の東西両端は次第に不明確になるが、調査区中央西端で検出した溝 1 1 が斜行溝 1 の西延長に当たる可能性がある。

II 藤原宮期以前七世紀後半の遺構

① 藤原京条坊施工期の遺構 条坊道路とその東西両側溝、建物2棟、堀3条、溝1条がある。

東一坊坊間路と東西両側溝 藤原宮の先行条坊道路で、溝 6 と溝 7 は東一坊坊間路のそれぞれ東側溝と西側溝に当たる。

堀 2 溝 6 の東2mにあり、先行条坊道路東一坊坊間路に沿う南北堀で、第2次調査では南端の3間分を検出し、南には延びないが、北に延びると推定されていた。今回21間分を確認し、全部で24間となった。一部に柱根の残るものもある。

堀 3 堀 2 の北端から東に延びる東西堀で、今回は22間分を確認したが、さらに調査区外東方へ延びるものと思われる。

建物 1 堀 3・溝 3 より新しく、藤原宮期の東大溝より古い南北棟掘立柱建物。

堀 4 溝 6 の西2mにあり、先行条坊道路東一坊坊間路に沿う南北堀で、10間分を確認した。第2次調査ではこの堀の延長上で同様の柱穴を検出しておらず、また北端

についても不明である。

堀 5 堀 4 の西5mにある南北堀で、13間分を検出した。堀 4 同様に第2次調査では検出しておらず、また北端についても不明である。

建物 2 堀 5 の西3mにある南北棟建物。桁行き6間、梁行き2間。

溝 3 堀 3 より新しく、建物 1 より古い東西溝。

② 七世紀後半期の遺構 建物4棟、堀1条、溝3条がある。

溝 8 南北溝で、南端で西へ逆L字状に曲がる。溝 9 より古く、7世紀後半代の土器を出土するが、遺物は少なく、水が流れた様子はなく、一時に埋められたと考えられる。

溝 9 溝 8 の西1mにある南北溝で、溝 8 より新しい。7世紀後半代の土器を出土し、最上層では瓦も出土しているが、遺物は少ない。溝 8 同様に水が流れた様子はなく、一時に埋められたと考えられる。

溝 1 0 7世紀後半代の土器を出土する東西溝。

建物 3 桁行き4間、梁行き2間の南北棟掘立柱建物。この建物は北で東に振れ、建物 4～6・堀 6 も同じく北で東に同じ角度で振れており、同時期のものと考えられる。

堀 6 建物 3 の西1.5mにある南北堀で、5間分を検出した。この堀は第2次調査区で検出していない。

建物 4 堀 6 の西8.5mにあり、建物 3 と東西両妻の柱筋を揃えて建つ桁行き5間、梁行き2間の南北棟掘立柱建物。

建物 5 調査区西端で東西に並ぶ掘立柱穴を3個検出した。掘立柱建物の一部と考えられるが、建物が調査区の西方へ延びるために棟の向きや規模などは不明である。

建物 6 調査区西端で南北に並ぶ掘立柱穴を4個検出した。建物 5 同様掘立柱建物の一部と考えられるが、建物が調査区外西方へ延びるために棟の向きや規模などは不明である。なお建物 5 の東端の柱穴と柱筋が揃っている。

III 古墳時代の遺構 斜行する溝2条がある。

斜行溝 2 古墳時代前期(4世紀)の土師器を出土する溝。

斜行溝 3 古墳時代中期(5世紀)の土師器を出土する溝。

IV 藤原宮期以後の遺構 斜行溝・礎敷き遺構と多数の素掘り溝がある。

斜行溝4 藤原宮廃絶以後の溝。凝灰岩の破片や藤原宮期の瓦・土器を出土した。礎敷き遺構 調査区の中央やや南寄りで、その西端から東端にかけ全長約100mにわたって検出した河原石を積み上げた遺構で、藤原宮廃絶以後に属する斜行溝4より新しい時期のもの。上面より10世紀代の瓦器を出土した。河原石の高まりが良く遺っている箇所では幅3m以上、高さ0.3mある。この礎敷き遺構は、復原された高市郡路東条里25条2里29坪と30坪の坪境に位置していること、調査区東辺で検出した素掘り溝のうち古い時期に属すると考えられるものがこの礎敷き遺構以南に延びないことなどから、条里にともなう坪境の道路遺構である可能性が高い。

(2) 出土した遺物

調査区全域から、多量の瓦、弥生時代・古墳時代・7世紀前半から藤原宮期・平安時代の土器などが出土したが、土器では亀を模したと思われる形象硯や葡萄唐草文を陰刻した須恵器蓋、新羅土器の壺、土馬などの特殊な土製品が出土している。

東大溝はまだ上中2層を掘り下げただけであるが、中層からは瓦、土師器・須恵器、木簡、木器と多量の加工木片などが出土している。出土した遺物は現在整理中であり、詳細は検討中であるが、木簡はその殆どが断片であり、そのうち釈読可能なものについては別に釈文を掲げる。また木器には、祭祀用具(刀子形・舟形・鳥形)や日用品(留針・しゃもじ・曲物・叩き板)などがあり、布片も出土している。

築石

I (藤原宮期) 第2・4次両調査で存在が推測されていた園池については、積極的にその存在を示す資料を得ることはできなかった。むしろ園池に関連すると考えられていた遺構が藤原宮期以降に属することが確認された。従って大極殿院東方に位置する内裏東外郭地域の南半部は、その南端に第2次調査で検出した礎石建建物があるのみで、空閑地であったことになる。

II (藤原京築坊施工期) 調査区の東南域に北と西を掘立柱塀で囲まれた南北50m、東西50m以上の区画が存在していたことが確認された。しかし現在まだ調査は継続中であり、内部の建物などについては不明であるが、今後の調査の進展によっ

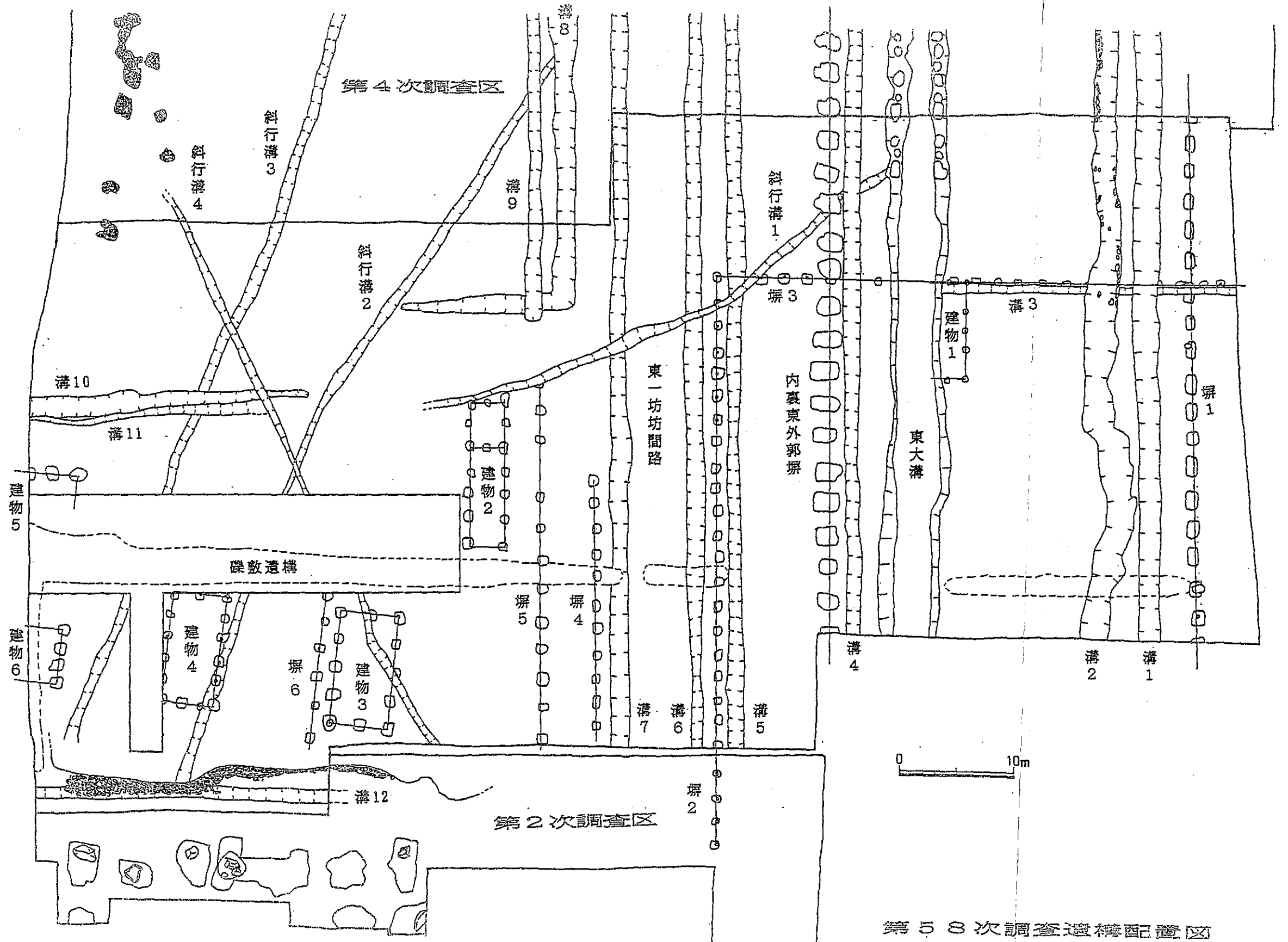
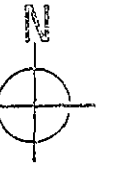
てその構造が明らかになるものと期待される。

III (七世紀後半の時期) 調査区の西南域に振れを同じくする建物4棟と塀1条を確認したが、建物の配置からみてさらに西方やあるいは南方にこの時期に属する比較的まとまった建物群の存在が推測される。

IV (藤原宮期以後) 藤原京廃都後施工された条里にともなう道路遺構である可能性の高い礎敷き遺構を検出した。既に主として平安時代以降の文献史料に基づいて条里の復原が大和国全域にわたって行われているが、今回の調査で検出した礎敷き遺構が条里にともなう道路遺構であるとする、条里制の研究にとって重要な一基点を与えることになるものと考えられる。

東大溝出土木簡釈文(稿)

(1)	・ 鈴鹿郡高宮里 ・ 炭一斛	126 × 22 × 4
(2)	美奈伎郡志自弥里灰一斛	157 × 23 × 3
(3)	加夜里委文連□□	157 × 17 × 6
(4)	□□里雀部牧男	121 × 27 × 3
(5)	鳥見大豆塩无	76 × 19 × 2
(6)	建部君百足 語部君尾□ 〔勝カ〕	229 × 27 × 4
(7)	七日大史從七位上□□□□	(172) × (8) × 5
(8)	・ 〔丙申年カ〕 ・ □□年カ ・ □□七月三□野国カ ・ □□山方評 ・ 大桑里□□安□藍一石	185 × 23 × 4



第58次調査遺構配置図